



ロシアの天才的心理学者～心理学におけるモーツァルト♪～

# Lev Vygotsky

(1896 - 1934 年)

ヴィゴツキー班：後半担当 M2 佐藤 朝美  
[satomo@highway.ne.jp](mailto:satomo@highway.ne.jp)

## ◆ ヴィゴツキーの主な書籍 ◆

年代	著 書	備考
1996	誕生 *ピアジェ誕生	
1914	モスクワ大学	
1916	卒論「デンマークの王子ハムレットの悲劇、W・シェイクスピア」	
1917	*ロシア革命	
1923	*ピアジェ『子どもの言語と思考』	
1924	「反射学的研究と心理学的研究の方法」で学会デビュー *ピアジェ『子どもの判断と推理』	
1925	『芸術心理学』（博士論文となる）	
1926	『教育学的心理学』 『「発達」の最近接領域』の理論 『障害児発達・教育論集』 『ごっこ遊びの世界—虚構場面の創造と乳幼児の発達』	
1927	『心理学の危機』	
1930	『子どもの想像力と創造』 『子どもの心はつくられる—ヴィゴツキーの心理学講義』	
1931	『文化的—歴史的な精神発達の理論』 『思春期の心理学』	
1932	『児童心理学講義』	
1933		
1934	『思考と言語』 ～年6月11日、サナトリウム「銀の林」にて逝去	

## ◆ 『子どもの想像力と創造』 ◆

1930 年出版

芸術学、教育学、心理学の領域に関わり、子どもの視点から  
みた遊び、ことば、絵、学習等のあらゆる活動を扱い、子ども  
の発達におけるそれらの役割を明確に定式化した著作。



### ■創造と想像力

人間の活動 2 つ

1 つ目：再現活動とか記憶 神経形質の可塑性 以前の経験

2 つ目：新しい形象 創造的な行動 複合行動

=>以前の経験を保持し複合し創造的に作りなおし、  
新しい行動をつくりだす

=>心理学者は、想像・空想ファンタジーとよんでいる。



でも、実際には、想像力があらゆる創造活動の基礎として文化生活のありとあらゆる面においていつも姿を現し、芸術的な創造、科学的な創造、技術的な想像を可能にしている。

この意味において、私たちの回りにあるもの、人間の手によって作られたものはすべて例外なく、つまり自然の世界とはちがう文化の世界すべては、人間の想像力の産物であり、人間の想像力による創造の産物なのである。

Ex) 子どもの模倣遊び

### ■想像力と現実

**\*創造的な複合活動はどのようにして起こるのか？**

=>この活動はただちにはおこらず、きわめてゆっくりと随時起こる。

初歩的で素朴な形態からゆっくり階段を追って、より複雑な形態に発達していき、各年齢段階ごとにそれぞれ独特の表現があり、子ども時代の各時期に特有な独自の創造形態がある。さらに創造活動は人間行動において独立していることはなく、他の種類の活動、なかでも経験を蓄積する活動に直接依存している。

=>想像活動の心理学的なメカニズムを理解するために、人間行動における空想(ファンタジー)と現実の関係を解明

○○ **想像と現実の結びつきの形態 1** ○○

想像のあらゆる創造物がつねに現実のなかからとられた諸要素、人間の以前の経験にふくまれている諸要素からつくりあげられているということ。

人間の本性についてのべられている宗教的で神秘的な観念だけは、空想の所産の起こりをわれわれの以前の経験によらないで、なにか外部的な超自然な力によるものだとすることができた。

極めて空想的な作品でさえも、結局において現実からえられたもので、われわれの想像力によってただ歪められたり、あるいは作り直されたりするそういう諸要素を新しく複合したものにほかならない。

お伽噺のイメージがつくりあげられた諸要素は人間のリアルな経験のなかから取られていて、そしてただその組み合わせだけが、お伽噺の形跡、すなわち現実や構想に一致しない形跡をもっているのである。

想像は、常に現実によってあたえられた素材によって作られている。

想像を想像する活動は、人間のもつこの経験の豊富さと多様さに直接左右されている。それというのは、この経験は空想の建物を作っている素材なのだからである。人間の経験が豊かであればあるだけ、その人の想像が自由にできる素材は多くなるのである。だから自動のもっている想像が大人のもつものより貧弱なのであり、そしてそれは子どもの経験が著しく貧弱な点で説明することができる。

⇒子どもたちの創造活動のためにしっかりした基礎を作りたいと望むのであれば、子どもの経験を広げる必要がある。

これによってひきだすことのできる教育学的結論は、われわれがもし子どもの創造活動のため十分確固とした基礎を創り出したいなら、子どもの経験をひろげる必要があるということにある。子どもが数多く見、聞き、経験すればするだけ、その子がより多く知り、自分のものにすればするだけ、その子が自分の経験で現実の諸要素を数多く持っていればいるだけ、他の条件が同じである場合にはその想像の活動はずっとすぐれて、効果的なのである。

### 〇〇 想像と現実の結びつきの形態2 〇〇

空想的な構想の諸要素と現実との間ではなくて、空想の既成の産物と現実の何かの複雑な現象との間の結合。

歴史家や旅行者の研究や物語にもとづいて砂漠の情景をつくりあげるなら想像の創造的活动的結果なのである。その情景は、以前の経験において把握されたそのものを再生するのではなくて、この経験から新しい複合を作り出すのである。

創造の終局的な産物とあれこれの現実的な現象とのこの結合こそが空想と現実との第二の形態ないしは最高の形態をも表しているのである。

こうした結合形態は、他人の経験または社会的な経験によってだけ可能となるのである。

この意味において想像は人間の行為と発達においてきわめて重要な働きを獲得する、想像は人間の経験の拡大の手段となる、というのは人間は自分が見なかったものを想像することができ、自分の直接的な個人の経験では存在しなかったことを他人の物語や記述によって思い描くことが出来、人間は自分自身の経験の狭い範囲や狭い限界にとどまらず、他人の歴史的及至は社会的経験を想像力の助けをかりて自分のものとし、この限界をずっと超えて出ることができるのである。この形態において想像は人間のほとんどあらゆる知的活動の完全に欠くことのできない条件なのである。

### 〇〇 想像と現実の結びつきの形態3 〇〇

想像の活動と現実性との間の結合の第三の形態は情動的な結合である。この結合は二重な様相としてあらわれる。一面からすれば、あらゆる感情、あらゆる情動は、この感情に相応する一定の形象に具象化することを目指している。情動は、こうして、この瞬間にわれわれの心をとらえたその気分と調和した印象、思想および形象をえらびだす能力というようなものをもっているのである。

あらゆる人々は、悲しみや、喜びを、われわれがすべてまったく違った眼をもってみるということを知っている。心理学者たちはあらゆる感情が外形的な、身体的な表現ばかりでなく、また思想、形象および印象を組み合わせるばあいにはあらわれる内面的な表現をもっているというその事実をずっと前からきづいていた。この現象を心理学者たちは二重の感情表現の法則と読

んだ。

#### 〇〇 想像と現実の結びつきの形態4 〇〇

この形態の本質は、空想のなせる構成が、人間の経験にはかつてなかった、そしてなにか実在的に存在している事物には相応しない、何か本質的に新しいものであるということである。

とはいえ、外形的には具象化されて、物質的に具体化したこの「結晶化された」想像力は、現に事物となって、この世界に存在しはじめ、他の事物に影響をあたえはじめる。具象化された想像の実例としてあげられるのはあらゆる技術的な装置、機械や道具である。それらは、人間の複合化した想像によって作り出され、自然界に存在するどんな見本にも一致しないけれど、現実とのもっとも確実に効力のある実際の結びつきを示している。

技術的な領域だけでなく、情動的な領域、主観的な想像の領域においても、空想の産物は具象化し、再びそれらはすべてこの現実を変える新しい能動的な力となって戻ってくる。＝想像力の創造的活動の循環とも言える。

⇒思考と同様、感情は、人間の創造に突き動かされる。

芸術作品は、われわれの内的世界、思想と感情に対して、技術的な道具が外的な世界、自然界に対して与えるのと同じような影響力を持っている。

### ■創造的な想像力のメカニズム

想像とはその構造の点で非常に複雑な過程。

その過程の成分となっているいくつかの要素について紹介

#### 1. 人間の経験の基盤となっている外面的、内面的な知覚

子どもが見たり聞いたりしているものは、その子の将来の創造のための始点である。＝後の空想を作るときの蓄え。

⇒この素材を加工していく複雑な過程が続く

その過程の最も重要な構成部分

知覚した心的体験を分解することと連想すること

**分解：**複雑な統一体の個々の特徴を分離する

**修正：**分解された要素は、人間の内的な神経興奮とそれに相応するイメージの力動性にもとづいて形を変えていく。数学上の誇大化は、人間にとって高度に重要。天文学やその他の自然科学ではきわめて大きな数字を扱う。科学はまるでその発達が想像力を押しつぶしてしまっているかのように避難されるのだが、実際においては科学は想像の創造のために比べ物にならぬほど広い領域を開いている。

**連合：**分解されたり修正されたりした要素を統一すること

この連合は、さまざまな基礎の上に起こり、イメージをまったく主観的に統合するレベルから、たとえば地理学的な概念のように客観的、科学的な統合に至るまで、さまざまな形をとる。そして、個々のイメージを結びつけ、それをシステム化し、複雑な情景を組み立てることが、創造の予備的作業の究極的・最終的な要素。さらに、想像が実現化したり、外面的なイメージとして結晶化したときにこの活動の循環が終了する。

そのような結晶化が起こる要因

①環境に適応しようとする人間の要求

創造の基礎には常に不適応があり、その不適応から要求や志向、希望が生まれる。要求とか志向とかの存在は、想像の過程を動かし、神経の興奮状態の痕跡をよみがえらせ、その活動のための素材を与えている。

②想像が複合化の能力とその活動の練習に左右され、想像の産物を物質的な形に具象化する力にも左右されている。また、環境にも依存する。

あらゆる発明家は、天才といえども常にその時代、その環境の作物である。創造とは歴史的な継承の過程であって、そこでは後発のすべてのものが先行するものによって定められている。

## ■ 幼児・児童の想像力

子どもの発達各時期において創造的な想像は、その子どもが位置している発達段階に固有な形で働いている。

子どもの想像力と成人の想像力との違いは何か？

子ども時代に発達する想像の基本路線はどのようになっているのか？

=>

- ・子どもの経験は成人の経験に比べてずっと乏しい
- ・子どもの興味は大人よりずっと単純で初歩的で貧弱
- ・環境との関係も成人の方が複雑で繊細、多様性がある。

子どもが全般的に成熟していくにつれて、想像力も成熟していく。

\* 子どもは自ら創造したことをより信頼し、それらをあまり統制しようとしな  
い。 (内田伸子さんの論文とかで引用している)

そのため、想像はことばの俗的な意味でも教養的な意味でも真実であろうと虚構であろうと子どもにおいては大人よりも多い。けれど、想像力のもとになる素材だけでなく、素材に加わる複合化の性質も子どもにおいては成人よりも貧弱だし、その性質、多様性も成人の複合よりも著しく劣っている。

ex) リボアの想像発達曲線頭



- ・ 現実との結びつきのあり方のうち、子どもの想像力が同程度に獲得しているのは、第一の想像のよりどころとなっている要素の現実性だけである。
- ・ 他の結合形態は、年とともにきわめてゆっくりと発達する。
- ・ M 点において想像力と理性のに曲線が会って以後の想像力の発達、MN 線が示しているように、理性の発達曲線 X0 は並行的に進む。
- ・ 子どもの年齢期に特徴的だった食い違いはここで消え、想像力は思考力と結びついて、今度は歩調を合わせて進んでいく。そして、曲線 MN1 のように、たいていは、急速な下降線をたどり、創造的な想像が減退していく。

主観的なものから客観的なものによっていく過渡的年齢の特徴

生理学の領域＝大人の身体と大人の脳が形成される

心理学の領域＝想像過程の純粋な主観性と理性過程の客観性との間の対立

別の言葉＝知性の不安定性と安定性の間の対立

これと同じ時期に想像の二つの基本的な型が表面化する

可塑的(外面的)想像＝客観的想像：外的な心的体験のデータを利用して、外から借りてきた諸要素によってつくられる。

情動的(内面的)想像＝主観的想像：内部からとられた要素によってつくられる。

\*それぞれの想像の型が現れて、だんだんと分化していくのがこの年齢期の特徴

## ■「創造の苦しみ」

創造は人間に大きな喜びをもたらすと同時に、それなりの苦しみ＝創造の苦しみもある。

- ・ 想像力の最終的な最も重要な特色である。
- ・ この特色は、具象化に向かう想像力の志向であるとともに、想像力の本物の基礎であり、創造の原動力である。

想像力のあらゆる構造は現実から出発し、人間の志向と意向に対する反応として発生しながら、完全な循環を描き、現実の存在になろうと目指している。

理念は、創造的な想像力がつくり上げるものであり、それが人間の行為やふるまいを導き、具体化と実現化を目指すとき、はじめて現実的な生きた力となる。子どものあらゆる教育において（夢想ではない）想像力を形成することは、個々の機能の訓練とか発達促進という部分的な意味だけでなく、人間の行動全般に反映する全体的な意義を持っている。この意味において、未来における想像力の役割は大きくなっていく。

## ◆ 『思考と言語』 ◆

1934 年出版

思考とことばに関する心理学的研究の名著。理論的・批判的研究に目を向けながら、児童期における言葉の意味の発達の基本的道程の解明と、子どもの科学的概念と自然発生的概念の発達の比較研究を行う。



### ■第一章 研究問題と方法

「思考」と「言語」という、人間の本質的なふたつの心理学的対象の相互の内的関係という、心理学における最も複雑且つ重要な問題のひとつを発達の・歴史的観点から取り上げる。

思考と言語を考える際に分析すべき「単位」とは何か？

→言語的思考の単位としての「意味」

### ■第二章 ピアジェ論争

論点＝子どもの「自己中心性」と「自己中心のことば」をどのように理解するか？

「自己中心のことば」

就学前の子どもに顕著に見られる、他者に向けられていない、独語のような発話。  
学齢期以降にはほとんど見られなくなる。

- ・ ピアジェがこの概念をフロイトの精神分析の理論やブロイラーの「自閉性」の概念と関係付けながら、子どもの自己中心的思考は、現実への適応機能を果たすものというよりは、夢や白昼夢に近いものと考えていることを批判。

⇒のちにピアジェも同意

子どもにおける象徴的遊びを説明するために必要以上に自閉的思考と自己中心的思考との類似を強調していた。

- ・ フロイトの「快楽原理」が「現実性の原理」に先行するという思想をピアジェが無批判に取り入れていると批判

⇒のちにピアジェも同意

欲求の充足と適応の機能とは統一的に把握されなければならないというヴィゴツキーの見解に同意。

- ・ 自己中心性の問題は自己中心的言語係数（子どもの話しことば全体の中に占める自己中心のことばなどの割合）などの統計的数字にあるのではなく、自己中心のことばというそのものに大きな心理学的問題が潜んでいる
- ・ この事実を実験で確かめていると共に、その実験中に、子どもの活動の中に障害を持ち込んで自己中心的言語係数が上昇する事実や、自己中心のことばが<内言>に転化することによって減少する事実などの興味ある観察を行っている。
- ・ 自己中心のことばは<内言>に発達する前段階に現れるものであるという新しい仮説を提出している。
- ・ ことばの最初の機能はおおまかなコミュニケーションの機能であり、それが分

化して自己中心のことばとコミュニケーションのことばに分けられるという  
ヴィゴツキーの考えにも同意を示している。

## ■第六章 子どもにおける科学的概念の発達の研究

### 生活的概念と科学的概念

生活的概念		科学的概念
生活の中で事物に触れること で獲得	習得の 場	学校で教授されることで獲得
自然発生的	習得の あり方	非自然発生的
非自覚的・非随意的操作	操作の あり方	自覚的・随意的操作
非体系的	体系的 性	体系的
具体的・事実的結合	概念間 の関係	抽象的・論理的結合
複合的思考	思考形 式	概念的思考
「今朝は事故でバスが止まっていたので、 学校に遅れた。」	例	「存在するあらゆる社会の歴史は階級闘 争の歴史である。」

(2004/07/01 文化人類情報学基礎Ⅲ資料より)

#### 生活概念

- ・ 子どもの個人的な経験の中で、体系的を書いたまま発達する。
- ・ 体系的を欠くため、自覚性と随意性がない。

#### 科学的概念

- ・ 日常生活と切り離されているため、本質的に体系的なものである。
- ・ 子どもは、大人の協力（共同作業）の下で、科学的概念を操作すること（＝概念的思考）を学び、やがてそれを独力でできるようになる。  
⇒学校で科学的知識の体系を習得することにより発達
- ・ ひとたび概念的思考ができるようになると、形式陶冶のはたらきによって、もともとの自然発生的な生活的概念の構造も改造され、子どもの言語的思考の形式が変化していく。

#### 発達の最近接領域

「最近接」は「近くの」を意味する形容詞の最上級を訳したもの。  
子どもの発達水準には、子どもが「できること」（現下の発達水準）と、「現時点ではできないが、潜在的にできる段階にあること」（発達の最近接領域）とがある。

子どもが独力で行う問題解決の水準（現実的発達水準）と、大人の援助や助言の下で、あるいは自分より能力のある仲間の協力の下で行われる問題解決の水準（潜在的発達水準）の間のへだたりのこと。

- ・ 子どもは発達の最近接領域にある高次精神機能を、「模倣を通じた共同による発達、教授－学習による発達」によって獲得することができる。
- ・ 「教育学は、子どもの発達の昨日にではなく、明日に目を向けなければならない」



## ■第七章 思想と言葉

### 内言と自己中心のことば

「外言」：外に向かう言葉

「内言」：内側で思考の道具—ひとりごととして用いる言葉

幼児の場合、内言と外言が未分化なため、内側の思考（内言）が、声を伴い、独り言（外言）として無意識のうちに漏れ出してしまうことが多い。

<「外言」から「内言」への発達過程>

- ① 少しずつ内化していくので外言が減っていく。
- ② 就学前後期に増加し、小学校の低学年で減っていく。
- ③ 省略されたり内化されたりするような構造上・文法的変化がみられる。
- ④ 発達と共に発話のタイミングは、行動に従うことから、計画や調整の機能をはたすように、プランを立てたり調整したりというような行動を先導する方向へと変化する。

## ◆ ヴィゴツキーの死後 ◆

### ■弾圧

「全ソヴィエト共産党中央委員会政令」

えせ科学的、反マルクス主義的な命題に基づいている（1936年7月4日付）

→出版禁止

### ■弾圧の背景

「教育新聞」（1988年4月21日付）

「児童学者の壊滅が始まったのは、当時、モスクワ第110学校の生徒であったワシーリー・スターリン（スターリンの息子）が、知能テストによって低く評価された後であった・・・という。」

レオンチェフ：「それが真相に近いかもしれない」

### ■復権と再評価

きっかけ：スターリンの死 1953年

↓

復権：スターリン批判 1956年以降

再評価：1980年代以降、特にアメリカで（ブルーナーの再評価）

後継者はルリア

### 【参考文献】

ヴィゴツキー『新訳版 子どもの想像力と創造』 新読書社（2002/07）

ヴィゴツキー（柴田義松訳）『新訳版 思考と言語』 新読書社（2001/09）

ヴィゴツキー『子どもの心はつくられる—ヴィゴツキーの心理学講義』 新読書社（2002/03）

柴田義松『ヴィゴツキー入門』 子どもの未来社（2006/03）

ローラ・E. バーク『ヴィゴツキーの新・幼児教育法—幼児の足場づくり』 北大路書房（2001/10）